工学系における男女共同参画 — 男性の立場から —

Gender Equality in Engineering Fields
— From the Viewpoint of a Male —

佐 藤 孝^{※1}
Takashi SATO

11年前のある日突然、所属している大学で、私に全学の男女共同参画の取り組みを手伝ってもらいたいとの依頼があった。学生時代に読んだボーヴォワールの本の影響で女性の生き方について少しだが考えていたこともあり、お引き受けすることにした。しかし、男女共同参画の現状については何も知らない状態であったので、勉強したいと考えていた。そのような時に、日本工学教育協会の第56回年次大会（平成20年度@神戸大学）のプログラムの中に「女性エンジニアの未来プロジェクト発足会」を見つけた。それに参加したことが、私が日工教の男女共同参画活動に関係するようになったきっかけである。

その後、事業企画委員会の中にできる女性エンジニア育成支援WGの委員の委嘱があり、情報収集ができると考え、参加させてもらうことにした。男性で、そのWGの最初の集まりに出席したのは私だけであった。そこで、自分が期待されているのは、「話をしっかりと聞き、男性の目線が必要となった時にコメントすること」だと勝手に考え、メンバーの発言を必死になって入力していった。WGの皆さんの発言は、私にとってそれこそ「目から鱗」なものばかりであった。そして、それらの発言をまとめながら、自分の考えが観念的なものから実践的なものへと変わって行くのを感じた。

日工教の事業企画委員会そのものも、色々な方と知り合いになり、お話しすることができて楽しい。積極的に活動するWGの女性メンバーのサポーターとして貢献できる事は、更に楽しい。そして、そこで学んだことを自分の大学に持ち帰って、大学の中の女性研究者支援の活動に結び付けることがまた楽しく、私の中でこのWG活動の優先順位が上がり、可能な限り毎回欠かさず顔を出すようになった。WGに参加し始める直前に、優秀な女子学生が研究室に入って来ていたこともあり、女子学生がいることで工学系の研究室も学科も学部も研究科も、そして大学も活性化すると感じるようになっていた。

それでは、女子学生がいることの何が工学部を活性化するのであろうか？ 勉強も研究も、必ず難しい問題に直面する。その時、「どのようにその問題を打開するか？」が重要なのであるが、学生がそして研究者が、それまで

経験してきた方法では解決できないことが沢山ある。教授としては、その時にどのようにアドバイスするかが課題になるのだが、学生自身が解決策を考え出してくれるのがベストであるのは言うまでもない。結局は、解決策を提案してくれる「優秀な」学生の登場を待つが、こちらから答えを与えるしかないのであるが、男子学生ばかりだとなかなか自発的なブレイクスルーが出てこない。しかし、女子学生がいることで、異なった考え方が出てくる可能性が高くなる。もちろん、女子か男子かではなく、本質的には本人の資質によるのだが、それでも異なる発想が1つあると、ディスカッションの中で打開策が見つかることが多いように思える。これまでの私の経験でも、難問にぶつかった時、全く異なる発想が出てくると解決策が見つかることが多かった。ダイバーシティ調査WGでも、私にとっては「新しい発想」が毎回出てきて、驚かされることばかりである。

同じ考え方をする同じような経歴を持つ仲間と、同じことを繰り返していくことも、1つの観点から見ると効率の良さに繋がり、良い事なのかも知れない。しかし、それが数十年の単位では続かないのは、我々のWGの調査や統計的情報から見ても明らかである。世の中も、ビジネスも、そして個々の製品開発も、新しい発想を取り入れていかなければ、必ず限界が来る。新しい発想を求めるのであれば、重要な判断を行う全ての場面で、ダイバーシティを取り入れていくことが必要である。

それでは、日本におけるダイバーシティの取り組みの現状はどうであろうか？ 最近になって、少数派の人たちの権利についての言及が増えてきている。しかし、国を動かす政治・経済・教育・芸術などの殆ど全ての分野で、判断を下す立場には明らかに男性が多く、女性が少ないのが現状である。ダイバーシティとは多様性である。少数派の人々の声を取り入れることは、ダイバーシティの観点で非常に重要なことである。しかし日本では、人口の半数を占める女性の声を取り入れた判断さえ、行えていないのではないだろうか？ これでは、ダイバーシティ豊かな社会とは言えない。そして、それが顕著に表れているのが、「リケジョ」すなわち「女性エンジニア」に活躍の場を提供する事に関する問題である。解決策は、まだまだ見えていない。会員の皆様の「新しい」意見を、是非お聞かせください。

2018年7月26日受付

※1 新潟大学工学部